
大好きだから

鹿波リオ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

大好きだから

【Nコード】

N9748D

【作者名】

鹿波リオ

【あらすじ】

悪夢は現実にはならない…と思っていた香凛に衝撃的事実がふりかかる。今組織に香凛、コナン、平次が立ち向かう！！

第1話危険な再会（前書き）

ある人と再会します。

大好きだから

第1話危険な再会

また、最近見る悪夢キッドが組織に協力する夢

「夢は、未来ではない、自分で決めるか…」その、悪夢のせいで寝不足が続く。

「香凛おはよ〜」友人の前では、ポーカーフェイス

「青子ちゃん、快斗、おはよう!!!」学校に行く、すると、快斗が小声で話す

「お前、寝てないだろ。」悪夢のせいでは言い無いので

「うん、最近依頼が多いから」探偵としてはおかしくない、理由を言う。

「ちゃんと、寝ろよ。」

「ありがとう、快斗」私は仲間を信じてるのかなあ？4時間目の途中放送が流れる

「不審者が学校に侵入しました。2階に向かわれたので、2、3年の皆さんは注意してください。」教室が騒がしくなる。先生が宥めるもの一向に静かにならない

「静かにして!!!騒いだ所で状況は変わらない。」静かになる。快斗が継ぐ

「確かに、下手に動いたら、駄目だな…」その時!!!

「動くな!!!」と不審者が私達の教室に入って来た。女子が騒ぎだす。

「此処に櫻井香凛は居るか？」と犯人がナイフを構えながら言う。

「私が櫻井香凛です。」と犯人の前に出る。

「こい!!!」と犯人が言う。

「何で行かなきゃ行けないの？」

「うるさい」と言つてナイフをふる、その攻撃をよけ犯人の手首を握りそのまま、あしばらいをする。

「くっそ!!!」私は犯人のお腹を殴り気絶して貰う。

「先生、これでっ正当防衛ですよね？」

「ああ」数分後警察が来る。

「目暮警部犯人は私を呼んで居ました。日を改めてまた、会いにいきますね。」「分かったよ」

「お願いします。」犯人は連行去れて行った。

数分後、快斗が私の腕を握る

「いつー何すんのよ快斗！！」

「やっぱりな避けた振りだろ……」

「あのまま、避けてたら、負傷者、多数でっ報道されてたわよ」と言いながら、包帯を巻く、次の日、犯人に会いに行く。

「どうして、彼処までして私を呼んだんですか？」犯人はしろももどろに答える。

「兄さんが人を殺そうとしてたんだ……」

「何で…何で…電話してくれ無かったんですか？」「急に言い出したんだ。」

「そうですね…お兄さんは必ず止めて見せますから。」次の日快斗と一緒にある場所に来ていた。

「こんなビルに呼び出された時点で怪しんで逃げてくれたらいいけど……」

「お前お人好しだろ？」

「探偵として一人の命を守りたいから。」人の気配がしたため、気配を消して隠れ話を聞く『ジン久しぶりだな』ジン！？まさか、『なんだ？こんなビルに呼び出して？』まずい、このままじゃ兄さんが殺される！！『お前を殺すために呼び出したんだ！！』兄さんが拳銃を取り出す。『ホー、』ジンも拳銃を取り出す。やばい、トランプ銃を取り出し2つの銃を撃つ『誰だ？』私は姿をあらさわず言う

「海原七海探偵よ！！」気配が近づいて来るので、軽快の音を立ててその場から消える。

「びっくりしたー」

大好きだから

「お前バカだろ？」
「大丈夫だよ。思っいきり偽名使ったから。」

第1話危険な再会（後書き）

2話目頑張って投稿します。

大好きだから

第2話ブラックキッド(前書き)

ブラックキッド参上!?

大好きだから

第2話 ブラックキッド

次の日、お父さんからもらった紙を持って、電話をしていた

「コナン君すぐに博士の家に来て!!」

「なにがあつた!?!」

「詳しくは来たら教えるから」その後博士の家に着く

「博士、平次君来てる?」

「来ておるよ」

「なんや? 香凛」

「とりあえず、この紙見て」

「予告状かいな」

「問題は差出人よ...」その時コナン君が来る

「コナン君もとりあえずこの紙を見て」コナン君はそれを読み上げる

「2人の人が北の星の中心に並ぶ時にはいどシティーホテルに我は
参上する。B、K?」

「ブラックキッド...からの予告状...」

「まさか!?!」

「私だつて信じたくないキッドがブラックキッドをしようとしてる
なんて...」

「とりあえず、今日その場所にいくわ...怪盗快音として」

「無理すんなや...」「大丈夫だよ」と言つてはいどシティーホテル
に行く

「時間だな」

「うん行つてくるね...」と言つてはいどシティーホテルの屋上に向
かう

「着いた...まだきてない?」数分後、

「オメエ...誰だ?」ブラックキッド...

「どうも、お待ちしてましたよB、Kさん」

「お前は誰だと聞いてんだ!?!」

大好きだから

「私は怪盗快音…怪盗キツドの仲間です」「怪盗キツドだと？」
「貴方と真逆の服を着る白き罪人ですね？怪盗キツドさん？…いえ…
…黒羽快斗君？」私は体が震えている
「黒に染まっちゃったなら白には戻れ無いんだよ。」
「戻るよどれだけ黒に染まっても白が多かったら白に戻るよ…」
「うるさい…！」
「貴方には快斗として守らないと逝けない人がいる筈でしょ…！」
「あいつは黒に染まった、俺を見て、俺の事を嫌いになる。」
「ほんなら、俺らがお前を白にもどしたる…！」
「お前に黒は似合わねえよ」
「貴方には、白き仲間が居るんだから…」
「うるさい…！」軽快な音を立ててキツドは消えていた。「快斗には、白しか似合わないのに…」泣いている私の頭に平次君が手を置く
「白に戻したるな」
「ぜってーにな…！」
「うん…！」

第2話ブラックキッド（後書き）

ブラックキッドは白に戻る事が出来るか？

大好きだから

大好きだから

第3話アジト！？（前書き）

アジトの場所が意外な場所です。

第3話アジト!?

黒き罪人を白に戻すため、白き仲間が立ち上がる!!

「最近B、Kが中森警部を要求してるんだってさ…」

「お前、こそ最近怪盗キッドしてるだろ？」

「だって」

「にしても、全く組織の情報はいらへんやないか」

「それなら、大丈夫だよ」と言つてコナン君の追跡メガネのスイッチを入れてパソコンに付け地図を出す。

「探知機に気付いてない限り大丈夫だよ？」

「ついけとんなら言えや!!」

「昨日までずっと動いてたんだもん…」 「ほな行くで」

「服部!!」

「な、なんや工藤？」

「おかしいと思わないか？昨日まで動いてのがいきなり止まったんだぜ？」

「畏もしくは、アジトとは別の場所と言うことだよな？」

「ああ…」

「なんやと」 「まあ、動かないよりましだから。どっちにせよ、

明日にでも行くよ。」

「ああ」

「当たり前や」 「次の日

「此処!？」 「見おごえのある家は、

「工藤君の家だよな？」

「ああ…」

「とりあえず、入るで…」 「気配はない工藤君この家に地下室ってある？」

「無いに決まってるだろ？」 「確かに日本警察の救世主と呼ばれている工藤君が今まで気付かない訳が無い。ふと何故か何かに呼ばれた

気がした

「此方、」

「どしたんや？」

「此方に何かがある」

「行くか…」

「えっ？」

「ちいとも可能性があるんならそつちに掛けたらええやろ？」

「うん、ありがと」とりあえず行くと

「本棚かいな」あるメモに何か書かれていた。

「ホームズの本古い順に並べよ…だって」

「任せとけ」工藤君が本を並べる

「よし、これで最後…」と言って最後の本を本棚に閉まった瞬間、
本棚が動き出した

「ほら、工藤でもとけんはな…」

「びっくりしたー」

第3話アジト！？（後書き）

コナン（以下コ）「俺の家がアジトかよ！？」香凛（以下香）「まだそうと決まってるから大丈夫だよ…」平次（以下平）「そやけど、本棚の後ろちゆうんわびつくりやわ」コ「マジ驚いたぜ」香「キッド白に戻るかな？」平「お前がキッドを白に戻さなあかんのや！！」コ「お前しか出来ない事だろ？」香「コナン君、平次君、そうだよね。白き罪人を連れ戻さないとね…あの人の大切な人の為にも…」コ「ああ！」「平」それでこそ、香凛や「コ香」ご意見、ご感想をお待ちしてます。「平」よろしゅう頼むで〜」

第4話アジトの中に…（前書き）

言い忘れていましたが、此処では、コナンの事を工藤君と書いていますが、コナンは新一に戻ってません。

大好きだから

第4話アジトの中に…

「とりあえず行くぜ」工藤君に言われ我に帰る

「うん」3人の足音が響く部屋、持参の懐中電灯で辺りを見回しながら進む

「誰も出てこんな…」確かに人の気配が全くない

「確かに探知機場所には近づいてるぜ…」工藤君が追跡メガネを見ながら言った

「とりあえず進むしか道は無い見たいね」いつの間にか閉ざされていた扉を見て言う。その時なんと床が抜けた!? 咄嗟に吊るされた紐を掴み工藤君の腕を掴む

「平次君は？」

「落ちた見たいだな」

「どつちにせよ離すよ」

「ああ…」そのあなはさほど深くなかった。

「平次君」

「此方や此方」

「さあ、先に進むぜ？」

「うん」

「当たり前やる!!」しばらく、進むと扉が見えてきた。

「暗号？」

「ある人の口癖を入力せよ。だってよ…」

「そこら辺はまかせたわ」

「工藤君、ベルモットの口癖入れてみて」

「ああ……違うみたいだな」私の心の中にある言葉が出てきた快斗がキッドの時に使うある言葉

「謎は謎のままに…」

「えっ？」

「良いから」

大好きだから

大好きだから

「せやけど、それは…」

「可能性が有るんだっいたら少しでも可能性があるほうに掛けた方がいい…でしょ？」

「せやったな」

「入れるぞ」

「うん…」本当はそんな事あつて欲しく無かつたのだが、

「開いてもうた…」

「香凛大丈夫か？」

「大丈夫てつ言つたら嘘になるかな？」少し間を置き言つ

「迷つてばかりじゃ進め無いからそれと…快斗の為だから」

「だな!!」

「そやな」今、扉の向かう!!

第4話アジトの中に…（後書き）

コ「マジかよ!？」平「お前の家がアジトかいな」香「不可能な物を除外していつて余った物がどれだけ信じられ無くても、それが真相だ…でしょ？」コ「そうだな」平「せやつたな」香「私だつて、工藤君の家がアジトだった事にはびっくりした。」コ「香凛」平「お前」コ平「お人好しだろ？」香「それ快斗にも言われた…」コ「ごめんな」平「すまん」香「何、謝ってんの？私はまだ快斗が自分の意識でブラックキッドしてるとは思わない」コ「そうだな」平「せやな!!」

大好きだから

第5話 ノリックキッドが白に!?(前書き)

キッドが戻ってくれるでしょうか?

第5話 ブラックキッドが白に!?

部屋に入る『誰だ』ジンの声!?

「櫻井香凜探偵よ!」

「服部平次探偵や!」

「江戸川コナン探偵だ!」電気が付く『たつた、3人で此処に乗り込んで来たのか?』ジンが指を鳴らすと同時にしたつばが出てくる「ざつと、20人はいるね。」トランプ銃を取り出す

「キッドを返して!」『あいつは自分の意識で黒に染まったんだぜ?』

「それがどうしたの?キッドは絶対に白に戻して見せる。」数分後したつばを倒す。『さすがにしたつばでは、息の根は止めれんか?』ジンは軽快な音を立てて消えた。

「忘れてた…キッドは変装の名人だったよね?」「まさか」

「なわけあるか!」

「2人共私と同じ事考えてない?」「なわけないやると言いたい所やけど残念ながらその通りやと思うわ」

「俺も…」

「やつぱり」さっきのジンは快斗じゃないかと言う事だ。

「行こうか?」

「…せやな…」

「…だな…」ジンが消えた場所に向かって行く、

「此処で消えたけど、跡形も無いよ…。」「くっそ」私が快音の場合何処に逃げるかを考える

「上!」と言ってトランプ銃を頭上に向かって撃つ、『さすが、だな』

「ブラック…キッド…」

「正々堂々俺らと戦え!」

「3対1とはいわへんちゃん、1対1のさしの勝負や!」『3

V S 1でも良いぜ?」

「そんな事、私が許さない。」『はあ?』

「何時も、自分を追い詰めて、全部自分のせいにして…貴方には自分の命に代えてでも、貴方を元に戻そうとしてくれている。」『うるさい!!』

「私が相手をして挙げる…」『何で、お前が…』

「貴方の事が好きだから…」『香凛…』

「貴方が青子さんの事が好きでも、私の気持ちは変わらない例え全世界を敵に回してでも…」『少しの間を置いて言う』

「貴方の味方である。でも、貴方が黒の場合は違う私は白き罪人として貴方を止める!!」『じゃあ、遠慮なく行くぜ!!』と言ってキッドはトランプ銃を撃つ『何で避けないんだ?』

「っ…良かった快斗…もしかしたら操られるのかもてっ…思ったから…」

「まさか香凛そのために」

「お前つくづくあほやな」

「ごめんって」『香凛大丈夫か』

「はい、快斗」私がある物を差し出す。『服?』

「キッドのね、白に戻って、早く!!」『ああ』と言って軽快な音を立ててキッドは着替える

「やっぱり、快斗には白しか似合わないね。」『うるさい!!…』

「行くかうか?」

「ああ」

「そやな」『白に戻った俺を見て腰抜かすなよ』

第5話ブラックキッドが白に！？（後書き）

平「ほんま良かったなー」コ「だな」香「今後、一切このような事が無いように！！」快「は、はいすみません」コ平香「ハハハ」
「快「何笑ってんだよ！！」香「快斗は、それで良いの！！」快
「？」」コ香快「ご意見ご感想お待ちしております。」平「待つとるで」

大好きだから

大好きだから

第6話ボス登場！？（前書き）

香凛の衝撃的過去が、コナン達にばれる！？

第6話ボス登場!?

「行こっか…」 「ああ…」

「快斗?」 『なんだ?』

「此処はアジトなの?」 『言いづらいけど、そうだ…』

「ほんまかいな?」

「はは、」 嫌な予感がする。何か起きる様な気がする。『どうした?』

「何か、私達は此処に招かれてはいけない気がして。」 『大丈夫だ』
「俺らがおる」

「また、変な事考えてただろ?」 「だって」と言いつつ奥へ向かう、間もなく、大きな扉が見えてくる。『此処がボスの部屋だ』私の嫌な予感はピークに達し、体が震えている。『大丈夫だ』と言って快斗が頭に手を置いてくれる。

「ありがとう、もう大丈夫…」 落ち着きを取り戻し扉の向こうに向かう!!

大好きだから

「マジかよ!?!」

「地下何m位あるんや?」 『大体10m位だな』 部屋に入るといきなり電気が付く、今まで、薄暗い場所に居たため、目が眩む、『ホー君が裏切る何てね…』 『信じられんぞ』 この声は

「お父さん!?!」

「父さん!?!」 工藤君と私が八モる

「ほんまかいな…」 『マジだよ…』 『だから、言えなかった…』

「言つて欲しかった… 国民を守る… 警察官が悪事を働いてた何てね…」 『惚けるのは止めなさい…』 はあくばれたらしかたない

「快斗、平次君、コナン君今まで、隠して御免ね。」 と言って声を

変える

「押さしの通り元組織の仲間の柏原沙那美ですよ。」

「はあ〜?」

「なんやと」『探偵君達落ち、着いて悪までも元だから』

「今まで、何故黙ってた…」声を戻して言う

「貴方達の命の為よ。特に快斗はパンドラを狙って居たからね」『
パンドラを出して貰おか?』

「『『えっ!』!』」

「3人共そんなにびっくりしないでよ」『いや、びっくりするだろ?』

「パンドラは確かに持っていますですが、貴殿方には絶対に渡さない!」

第6話ボス登場！？（後書き）

快「おいおいマジかよ？」コ「一気に2つの事実しちまったな…」
平「ほんまゝあほやな」香「ごめんって！！」快「まあ、良いじゃ
ねえか、ちゃんと隠さず教えてくれたし」香「快斗人の事言え無い
でしょ」快「はい…すみません…」コ「ご意見ご感想をお待ちし
てます。」平「どしどし送ってな」

大好きだから

大好きだから

第7話パンドラの在処（前書き）

パンドラは意外に身近に有った！？

第7話パンドラの在処

『どう言う事だ？』快斗が聞く

「私が何時も首に架けている、このネックレスのなかにパンドラが入っているの…。」

「なんやと〜？』何で、早く言ってくれなかったんだ？』

「だから、言っただでしょ？貴方達の命に関わる事だつて…。」

「何で俺らの命に係ある。』工藤君が冷静に聞く

「貴方達の命が架けられたからよ…ある日、組織のボスは優作さんだと言う事を知った私は工藤君に伝える為屋上に行くと…優作さんが居て、もし、電話をしたら彼らの命はないと言って3枚の写真を投げた…それが貴方達3人なの。』何だと？』

「まじかよ！？」

「本当だよ？』早く渡して貰おうか？』

「嫌よ…と言いたいけど、皆が囲まれてるし…。」

「わりい無理だ。」

「右に同じや』諦めたくないけど、この人数はちよつとな』

「やっぱり？』こつなつたら

「意地でも渡さない！！』

「ああ」

「そんなん』当たり前だろ？』

「皆…ありがとう！！』

「行くぜ」

「平次君、これ！！』と言って、木刀を投げる。

「ありがとさん！！』お前に何ができる？』

「私に私しか出来ないことがある！！』と言ってトランプ銃を取り出し、パンドラに向ける。『そんな事したら何が起きるか知ってるかのか？』

「残念ながら数年前貴方に架けられた、呪いはとけてるわよ。』

呪い？」

「うん、その写真を貰った後気絶させられた時にいつの間にか呪いを架けられてたのよ…と言ってもアポトシキンみたない薬だけだね…」 『なんだよびっくりするだろ？』

「ごめんって！！」

「そうとわかったらこいつら倒すぜ！！」

「そやな、ほな行くで」 『おーお』 数分後、したつぱを倒す事に成功した、

「後は、ボスだけだね。」

「だな」

「言っとくけど、お父さんは剣の使い手ちなみに私や平次君より上手よ」

「俺の父さんは銃の使い手そこの警察官より上手いぜ。」 『まじ！？』

「あの、ハンデとして、最初に優作さん対快斗と平次君対紫郎さんもし、快斗や平次君が殺られたら、コナン君と私が入る。」 『それで、良いだろう。』

「ほんなら、最初は俺らやな！！」 『ああ…行くぜ！！』

第7話パンドラの在処（後書き）

快「香凜、大丈夫か？」香「心配するほどでもないよ。」コ「香凜
って結局2つの薬投与したのか？」香「うん：だけど、そのうちの
アポトシキンの作用を起こす物はほとんど薬が切れてるのよ。」平
「びっくりしたわ〜」香「まあ、もう縮む事は無いと思うよ。」快
「本当に大丈夫か？」コ「もし、人の目の前で戻っちまったら、ど
うすんだ？」香「大丈夫：薬は切れてるし後はこの呪いの印が消え
たら良いだけ」コ「肩に、文字が：」快「これが印」平「人間にこ
んなんつけれるやな！？」コ快「：ご意見ご感想をお待ちします。
」香「アドバイスもお待ちします。」平「どしどし送ってな
待とっんで〜」

大好きだから

第8話叶わない片思い（前書き）

組織は崩壊します。

第8話叶わない片思い

優作さん対快斗と平次君対紫郎さんの戦いが始まる！！

「両者共動いたら負ける事が分かってから…」工藤君が続ける

「どっちも動かない」

「この戦いは一瞬で決まる！！」私と工藤君が同時に言った瞬間、両者が一斉に動いた。「くっ…そ」

「キッド!?」快斗は腕を抑えていた。「探偵君後は頼みますよ」

「今さら、キッドになるな…」そして、工藤君は小声で言った

「任せとけて!!」と言って優作さんの所に

「うああ」

「平次君!?」平次君も腕を抑えている。快斗と平次君の止血を終え、紫郎の前に

「まさか、父さんと刀で勝負するなんてね。」「来い…」

「はい…はい」と言って刀を構える。「どっちも動かねえな。」

「当たり前やお互い親子同時、ちいとしても、先動いた方の負けや」
全神経を集中させる父さんが隙を見せる。「じつとしてたら始まらんぞ…」斬りかかってくる、父さんの攻撃を避ける。

「あぶな!!」少しは上手くなったか」

「好きこそ物の上手なれ…てっ言うでしょ?」と言ってすつと動く
「人間かいなああの動き!」「コナンのも人間ばなれしてる動きだな」

「ゲームセット」工藤君は優作さんのこめかみに銃を私は父さんの首筋に刀を添える。「敵わんな」そう言った父さんに時計型麻酔銃を撃つ工藤君も同じ事をしているだろう。「勝つてもうた…」
「はは、マジかよ?」その後、警察を呼び黒の組織は崩壊した。

事件から約1ヶ月後哀のおかげで、アポトシキンの解毒剤が出来てコナン君は工藤新一に戻る事が出来て無事蘭さんと付き合ってる見たいで、快斗も怪盗キッドを辞め青子さんと付き合っている。平次

君もめでたく、和葉さんと付き合っている。てっ、私だけ…と思いつながら、ある場所に向かう。真夜中、私は、はいどシティーホテル屋上にいる。

「はあゝ失恋と言うか、所詮叶わない片思いだったのかな？」

「何がですか？」

「キッド！？貴方、怪盗辞めたんじゃない？」

「快音さんこそどうしたんです？」

「此処がある人と初めて出会った場所だから、だよ？」

「そうなんですか…？」

「キッドさんは何用で？」

「私は此処で探偵君と初めて出会った場所ですから…」

「じゃあねキッド」と言っつてその場から消える。

第8話叶わない片思い（後書き）

快「勝ちつまった…」平「びっくりしたわ」新「だな…」香「まさか自分が勝つとは思わなかったよ…」快「私も聞かせて貰いましたよ…」一同「ご意見ご感想お待ちしております。」

大好きだから

大好きだから

第9話組織復活！？（前書き）

組織の復活！？

第9話組織復活!?

父さんの居ない部屋に、戻ったとたんに涙が出てくる。「はあ〜馬鹿だな私」次の日から（いろんなシヨックがあったので1週間を休んでいた。）学校に行く、

「香凜おはよ〜」

「青子ちゃん…おはよ…」

「1週間も休んだから心配したよ。」

「ごめんね…。」

「櫻井…」快斗が話し掛けて来た瞬間涙が出てきた。

「櫻井!?!」

「大丈夫何でもないよ…」と言って逃げ出し学校の屋上にいる。

「何でかな、母さん?私が好きになる人には大切な人が居る…でもね、その人が幸せになれば私は、それだけで幸せだよ?…:…あつ、授業始まる」1時間目音楽のテスト『じゃあ、主席番号順にt o m o r r o wを歌って下さい。』

「はい」ちなみに、私は櫻井なので、10番だ。『次、櫻井さん』

「はい…」約3分間後『あ、ありがとうございます。』そして、

2時間目が始まると電話がなる。『櫻井さん出なさい。』

「はい…はいー?すぐ行きます、快斗君もはい分かりました。…先生先日、捕まったある2人が脱走したそうです。快斗君もその場に居たので出来れば来て欲しいらしいです。」「行きなさい…黒羽君も」『ありがとうございます。黒羽君行くよ。』

「ああ…」学校を出て暫く走る。

「誰が脱走したんだ?」

「お父さん達よ…」『何だと?』

「とりあえず、警視庁に行くよ。」「警視庁に到着『来てくれたか…』

「逃亡者は現在何処に?」『ああ…此処だよ』

「工藤君の家の次は私の家なのね」『マジか』

大好きだから

「ありえんなさ」

「まったくだぜ」

「平次君に新一君」『すまんね、授業中に』

「いえ、慣れてますから…」『ほな、行くか…』

「ちよつとした作戦立ててな」

「このままにはしておけねえだろ？」

「うん！！」『こうして、新たに組織との戦いが始まる！！』

第9話組織復活！？（後書き）

快「また、復活した」平「次のアジトは…」新「香凛の家なんだ」
香「自分もびつくり」平「大丈夫なんか？」香「今回はちよつと」
新「無理があるよな」快「まあ俺達が居る」香「ありがとう快斗」
快「まあな……………」平「ご意見ご感想待つとるでー」快「どんどん送ってくれよー！」新「言葉使いに気を付ける…」快平「は、はいすみません」香「くすっ」平「香凛今笑ったやろ？」香「気のせいだつてー！」

大好きだから

第10話 アジトに侵入！！（前書き）

アジトに侵入

第10話アジトに侵入！！

「私の家の間取り図よ」と言っつて紙を渡す。

「サンキュー」

「広いな」

「でも、地下に続く用な場所あつたけな？」全く思い付かない。

「行かなわからへんな…」『行くしかないな』

「じゃあ、とりあえず、私は博士の家に泊まるわ。」次の日早朝、一宿の恩義として朝御飯を作る。

「出来た！！」

「旨そう」

「快斗早っ」

「俺達の分もあるんか？」

「うん、一応」

「良い匂いじゃの」私達は5人で朝御飯を食べ終え、準備をしていた。

「出来たか？」

「うん」

「万端やで〜」

「出来たぜ」そして、博士の家を後にして私の家に向かう。

「開けるよ？」

「ああ」扉を開ける。

「また、誰も出てこんな…」その時ふと、ある場所が、頭を過った。

「まさか、書斎！？」と言っつて書斎に向かうあるメモを読む。

「工藤優作の本を順に並べよ」

「任せとけつて……よし、これで最後」

「開いた」

「やっぱり此処だったんだ」

「なんか驚きの領域を越してもうたは〜」と話しながら歩いて居る

と、目の前にまた、大きな扉が！！

「まじかよ！！」

「洒落にならんわ」

「ハハ…」私がまた、メモを読む

「ある人の口癖を入力せよ。」

「またかよ」

「此処まで一緒やったらすすがに気味悪いは…」私は父さんが良く使う口癖を思い出している途中だ。

「あー思い出した。」

「なんやて」

「まず、新一から入れてみる。」

「ああ……………違う見たいだな。」

「ほんなら、香凜や」

「うん、」父さんがいつも言っていた言葉を入力する。

「開いた…な」

「ほんまやな…」

「行くぞ…」「うん」暫く歩くと、いきなり、電気が付く突然の事に目が対応出来ず、目が眩む。『君達はしつこいね』

「しつこくて結構ですよ…」工藤君が敬語を使う内が華だ。

「お父さん、いい加減しないと、大人気ないよ？」『全くいつから親にそんな口を聞く様になったんだ。』

「今、私は父さんの事を犯罪者としかみない。」『パンドラをくれませんか？』

「父さん！！」

「何が楽しいんですか？沢山の人を傷付けてまでしなきゃいけない事って何なんですか！！」『……………』

「答えてよ父さん…そんな、犯罪に手を染めた、父さんを見ても母

さんは喜ばない!!」『お前に何が分かる』

「分かりたくないよ…犯罪者の気持ちなんか…でも、父さんとしての気持ちは、理解しようと思張った…出来るだけ父さんに負担を掛けない様にした…って思ってた…最低だよ父さん…一番身近な人に裏切られたんだから…」『香凛…』

「でも、もう、許さない、命を掛けて国民の安全を守れ…てっ言ったの父さんだよ…だから、私は、国民の為に父さんと優作さんを敵にする事しか出来ない…」『国民の為…おごえて居たんだな?』

「小さい時からずっと言われてるからね…」『だが、我々も負ける分けにはいかないんだよ。』優作さんの後を父さんが継ぐ『今度は最初から最後まで親子で真剣勝負だ…もし、君達が勝ったらパンドラは諦め、大人しく捕まるよ…だが、君達が負けた場合、パンドラを渡して貰おうか?』

「そんなの、勝ち目がないじゃんか!？」

「無理や」

「いや、それで良い」わ」

「はあ?」

「勝負が決まる前から負けると決め付けて、負けるのが普通じゃ駄目、私達にも守らなければいけない物があるから」と言つて工藤君は優作さんの前に私は父さんの前に立ち、工藤親子は銃、櫻井親子は刀の闘いが始まった!!お互いの全てを掛けての闘いが……

第10話アジトに侵入！！（後書き）

快「凄い事になった」平「こんなんあり？」新「仕方ねえだろ？」
香「自分の親が犯人だよ？」平「確かにな」新「びつくりだぜ？」
快「自慢のポーカーフェイスもボロボロだよ」香「へえ…快斗のポ
ーカーフェイスがねー」快「何だよ！！」新「いや、ちよつと、」
平「ちよい俺にもおしえんかい！！」新香「嫌だ」「新香快」「
」ご意見ご感想お待ちしてます。」「」「平「どんどん送ってなー」

大好きだから

大好きだから

第11話消えたパンドラ（前書き）

題名と重なっていない気がします。

第11話消えたパンドラ

「もしかしたら、親子最後の対面かもね。」『そうだな』お互いの準備が出来たのを見た快斗と平次がほぼ同時に言った。

「「始まった」「前回とは違い、2人ともがほぼ同時に動き出した、」さすが親子やな」

「ほぼ同時に動き出したな」快斗と平次は驚きが隠せなかったか。

私は細心の注意を払い、父さんの攻撃を避ける『さすがだな』

「よっ」と「刀の上に乗った!？」

「（ほんますごいやちゃ）・ハ・ハ・」『何!!』

「腕が落ちたんじゃない?」と言って父さんの顔の紙一重で止める。『完敗だ』同じ頃工藤君も優作さんに勝つたらしい。

「約束通りパンドラを諦めて自主して下さい。」『パンドラは諦めるよ…だが、捕まる訳にはいかない。』

「くっそはなせ〜」

「はなさんかいこのドアホ」

「快斗」

「服部」『あの子達の命がどうなっても良いのか?』

「そんなに汚い奴だったのか父さん…」

「何が、望み何ですか?そこまでしてパンドラを何故、不老不死の薬にしたいのですか?」『お前の母さんを生き還らすためだ』

「「「えっ!」「」「」」『香凛君のお母さんを生き還らすために、パンドラを不老不死の薬が必要何だ…』私は、怒りが有頂天に達した。

「許さない…例えそれが、母さんのためでも有ろうと…絶対に許さない!!」『何だ?その言い方は?』「例え、お母さんが生き還えて来たとしても。」『ほー、あの2人の命は頂くよ?』

「誰が、あげると言いましたか?こうなるのは計算済みです。」と、言って指を鳴らすと一斉に、鳩が飛び出し、相手を攻撃する。そし

て、再び指を鳴らすと鳩は消える。

「すげえ」

「当たり前だ俺より何枚も上手だからな!!」

「へえ…キッドよりもねー」『君が快斗君よりも凄い、マジシャンだったのか。』

「警部今です!!」(掻かれ)目暮警部の声と共に、大勢の警察官が入ってくる。『なんだと』

「長年の探偵の感を父さんに使うなんて思ってなかったよ…」

数日後「懲役50年の執行猶予2ヶ月ですか。…」

「仕方無いんだよ…」

「執行猶予が2ヶ月でも、良い方ですもんね…」そう、だって…死刑でもおかしくない事なのだから。

「ありがとうございます…目暮警部…」その後、家に帰る途中だった

「きゃああーひったくりです。」しかも、私の方に来るし…『どっけー』

「退けと言われて退く奴が何処に居るわけ?」と言って犯人を取り抑える。

「早く、警察に電話を!!」

「は、はい」10分後警察が到着した。犯人を警察に渡し家に到着「はあ…何でこうなるかな?」

「それが運命だからですよ、香凛さん…」

「キッド…ありがとうございます!!迷ってばかりじゃ進めないもんね!!」そう、不可能な物を除外して残った物がどれだけ信じられな

大好きだから

くても、それが真相だから

(END)

第11話消えたパンドラ（後書き）

香「良かったね!!」快「最初はどうなるかと思ったな」平「俺出番少なすぎるわー」新「主人公の俺も全然でてないぜ。」快「言い争いになる前に伝えます。」香「ご意見ご感想をお待ちします。」新平「「がやがやがや」「快香「はぁー……」」

大好きだから

大好きだから

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9748d/>

大好きだから

2008年11月7日09時33分発行